

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



多様な生徒が集う 学び舎が誕生!

一群馬県立みらい共創中学校を訪ねて

7月8日(月)の午後5時半、夕方近いとは言えまだ猛暑の中。伊勢崎市にある「群馬県立みらい共創中学校」を訪ねました。今年の4月に開校したばかりの県内唯一の夜間中学で、永年にわたる地域からの要望と全国的な夜間中学設立の動きが実を結び、群馬県総合教育センターの敷地の一角に作られました。そこで、今回の取材には私たちぐんま教育文化フォーラムのメンバーに加え、伊勢崎市を拠点に外国人への教育支援を行うNPO法人Gコミュニティ代表理事の本堂晴生さんに参加していただきました。

当日は、飯塚幸校長先生をはじめ、前島隆宏教頭先生と石橋文行事務長さんが私たちを出迎えて下さり、授業が始まる前に学校の概要や生徒の様子について説明をして下さいました。

多様な生徒が集う学び舎

取材日時点での生徒数は、1学年35名、2学年9名、3学年8名の計52名です。4月1日の開校時の35名より17名増えているのは、この学校が随時入学制をとっているためです。ただ、1学年は定員の35名に達したため、現在募集停止中とのこと。

18時から始まる第1校時から21時10分に終わる第4校時までの4コマ(1コマ40分)の授業があり、学習内容は他の公立中学と同様に、学習指導要領に則り「総合的な学習の時間」を含む全ての教科の学習を実施しているそうです。

しかし、生徒の国籍は13カ国(ペルー12人、ブラジル11人、日本8人、フィリピン5人、中

国3人、ネパール3人、パキスタン3人、ベトナム2人、その他5人)で、生徒が使う母語も多様なため、必要な生徒には日本での教科学習や日常生活に欠かせない日本語指導を行っているようです。

そこで、この日本語指導の体制や生徒の学習の様子を把握することが、今回の取材の中心となるのがこの時点ではほぼ決まりました。

ワンフロアを区切った教室

説明の後、いよいよ授業の見学開始。興味津々で、階段を上がっていくと、そこには別世界が開けていました。大きなオープンスペース!これが学校?!

手前には3組の丸いテーブルとそれを囲むい



休み時間のCOMMONスペース

くつかの椅子が置かれ、始業前や休み時間の生徒の団らんで使われていて、この場所をCOMMONスペースと呼んでいるそうです。その奥に、高さ2メートルほどの白いパーティションで区切られた学年毎の3つの教室が並んでいます。でも、それぞれの教室にはドアがありませんし、パーティションから天井までの空間は全てオープンです。

学年の教室以外にもCOMMONスペースを囲むようにいくつかの小部屋が並んでいて、すでに授業が始まっています。それぞれの教室では様々な表情と年齢の生徒たちの熱心に学習に取り組む姿が見られます。私たちにとって見慣れた学校の風景とはまったく違い、10代から60代の生徒たちが集うこの学び舎はなんと表情豊かな世界なのだろう、とさらにワクワクしてきました。

今後も日本で生活するために

学年毎の大きな3つの教室の他に、4つの小さな教室を含む7つの教室すべてで、国語(日本語)の授業が進行していました。どうやら国語(日本語)の授業は学年共通のようです。

先生方が生徒に語りかけ、生徒がそれに応答しながら進むスタイルの学習が中心で、なんといつ



国語の授業

ても先生の語りはゆっくり丁寧です。生徒がそれに応じるように自分から発言している姿もあちこちで見かけられます。生徒に寄り添うように複数の先生方が教室で指導に当たり、手厚い指導が行われていることがわかります。

通常の中学生用の教科書の他に国語や数学(算数)では小学生用の教科書を使ったり、手作りの教材や日常生活に即した話題に触れたりするなど、先生たちの工夫がこらされていることがはっきりわかる授業です。そして、その工夫は生徒たちが日本で生活するために必要な日本語の能力を身につけるという目標のためのものでもあることもよくわかりました。

先生は日本語で授業を進めますが、生徒が互いの意志を伝えるのに英語を使うことも多く、時にはスマホの翻訳アプリを使うこともあるそうです。また、ポルトガル語兼スペイン語、英語、中国語、フランス語の計4人の通訳の方がいて、先生たちと協力しながら生徒の学習支援にあたっているとのことでした。

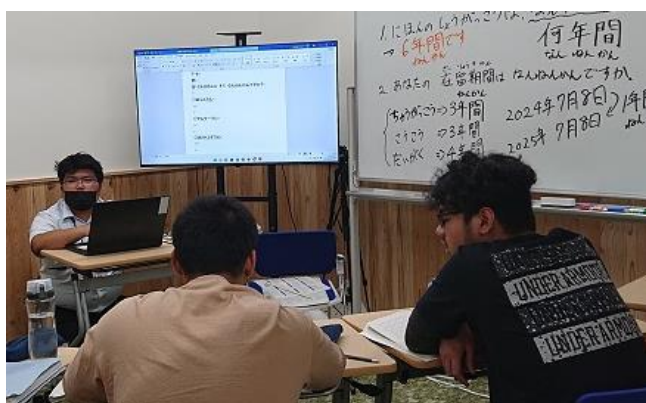


生徒に寄り添いながら

少人数学習が効果あり

開校してまだ3ヶ月ですが、学習内容を生徒に理解してもらうための試行錯誤が日々続いているようです。「取り出し指導」(文科省の用語ですが、この呼称にはもうひと工夫あれば...)と呼ばれる少人数での学習形態もその一つです。日本語の習熟度に応じて、1人の先生が5~6人の生徒に別の教室で日本語指導をします。開校当初、学年毎の教室の他に3つの教室が用意されましたが、現在はもう1つ増えて4つの教室で「取り出し指導」が行われています。

もちろんここでも先生の丁寧な指導の様子が見られますが、生徒同士が教え合う姿があちこちで見受けられます。これも、生徒たちの学ぶ意欲の高さによるものかもしれませんが、少人数のグループワークを取り入れることで、様々な理解度の生徒にとって良い効果をあげているように思います。これまでも通常の学校でグループワークは行われていますが、グループ内の役割の固定化や話し合いの形骸化が課題となることも多く、みらい共創中学校でのこの光景には新鮮な驚きを感じました。



互いに教え合う生徒

生徒たちの声から

今回の取材に先立ち、生徒個人への取材は控えてほしいと学校から要請されました。多様な生徒の就学にいたる背景を直接聞きたい気持ちはありましたが、学校側の心配も当然のこととして理解できる上に、取材の趣旨から離れて個人の複雑な事情に踏み込むことにもなりかねないため、生徒への声かけは見送ることとしました。

生徒の授業中の様子や休み時間の過ごし方を眺めれば、彼らがこの学校での生活を有意義に感じていることは充分にわかります。しかし、取材をしながら彼らの生の声を聞きたいとの欲求も募っていたところ、コモンスペースの壁の掲示物に「みんなで育てよう『みらい共創中学校』」と題したたくさんの付箋紙が目にとまりました。

ある授業で、「授業中」「休み時間」「その他」についてそれぞれの意見や要望を書いたものだそうです。それを読み進めると、彼らの肉声が

聞こえてくるかのような思いにとらわれました。

そこで、ほんの一部をここに紹介します。

◎授業中

- ・グループ活動で協力する
- ・興味・関心を持ってとりくもう
- ・チャイムがなる前に生徒たちはきょうしつにもどります
- ・先生の言うことをちゃんときく
- ・英語オンリーの生徒には通訳をつけてほしい
- ・授業中に隣の声大きいからやめてほしい
- ・先生が教えているあいだははなさないでください
- ・次の授業はどこの教室かわからない生徒が多いです
- ・授業は2時間続ける
- ・お互いにモチベーションを高める
- ・もっと会話の練習がしたいです
- ・リスニングの練習を取り入れてほしい
- ・ケイタイは授業に関係ある時に使用してほしい
- ・体育の時間は4時間目の方が良いと思います。汗をかいてくさくなるから

◎休み時間

- ・授業始まる前に座ってほしい
- ・すわれるテーブルがふえてほしい
- ・休み時間を守ってほしい
- ・トイレはきれいに使いましょう
- ・休み時間は一回だけあれば良いと思います
- ・自動販売機をふやしてほしい
- ・ルールをそんちょうする

◎その他

- ・もっと先生と気軽に話せる時間がほしい



前向きな意見がぎっしり

- ・資格を取れるサポートをしてほしい
- ・もっと相談がしやすいようになると気軽に相談できると思う
- ・沢山の国の生徒たちがいますので、先生たちがもっと外国の文化に興味を持ってほしい
- ・先生がやさしすぎ。もっときびしい方がいいですよ
- ・校長先生や教頭先生と話せる機会がないのでどんな人かわからない

この他にも、英語で書かれた記述には、

- ・試験を追加するなどして学習の成果が見えるようにしてほしい
- ・さらに広いスペースがほしい
- ・問題があれば先生に相談するべき

などがあり、この学び舎に集う生徒たちのより良く学ぶことを求める気持ちが、多くの付箋紙にそのまま表れているように感じました。

夜間中学(群馬県立みらい共創中学校)を見学して

NPO 法人Gコミュニティ 代表理事 本堂晴生
ぐんま教育文化フォーラムの方々が見学するというので声をかけていただいて、いっしょに7月8日に見学をした。

階段を上がり夜間中学がある二階に行き、眼に入るのは広々と開けた学びの空間。さえぎる壁や扉のない3つの教室や、日本語学習の4つの小教室、そして、コモンスペースにはテーブルが3卓ほどあり、休み時間には生徒たちが思い思いに座って、交流したり、軽い食事をとったりできる。

年代も国籍も今までの人生の経緯も様々な生

徒たちに、どのように一人一人に合った学びのサポートができるか、先生たちは教材も含め日々模索しながら授業をつくっている。例えば特長的なのは、クラスは3つの学年ごとにはなっているが、国語と数学の時間は学年に関わりなく、生徒のレベルに応じたクラス編成に変えていること。顔見知りの生徒も何人かいる。勉強が楽しいとのこと。

親の都合で日本各地を転々とし、最後の中学校でも不登校で、卒業後は引きこもりがちだった生徒が、毎日登校している。また、政情不安定な国から日本に来て、友達もいなかった生徒が、やはり毎日登校している。合同体育の時間の写真を見ると満面の笑顔で体を躍動させている。

母国で大学を卒業し、日本に20年以上いて、外国人児童生徒の日本語・教科学習支援活動をしてきた年配の人は、子どもたちのための支援の質を上げたくて、日本の中学校の勉強ができる夜間中学に入学した。大変だけど毎日の学びや、先生方の教え方を知ることがとても楽しいと言う。

4月に開校したばかりで、多様な生徒一人一人に合わせた学びのサポートを模索している今の状態は、生徒たちにとってはとても学びやすい環境だと思う。この多様性に合った学びが、県内の普通校に広がっていくことが期待される。

また、今後、2年、3年と経つにつれ、「教え方」の型ができてくるだろうが、「教え方」中心ではなく、一人一人の生徒に合わせようとする柔軟なこの学びが継続し、進歩していくことを願う。

取材を終えて

Gコミュニティをはじめとする全国各地の外国人支援組織の活動と要請が実を結び、教育機会確保法(2016年)による夜間中学の法制化が実現し、2024年4月群馬県にもみらい共創中学校が開校しました。

取材では通常の中学校とこの学校との「違い」に目が行きがちでしたが、私たちが痛感したのはこの学校の生徒たちの発する熱気や意欲は、ほかの学校のそれと本質的な部分で「同じ」だったことです。「多文化共生」や「多様性の尊重」を謳う自治体は多いものの、行政のアピールばかりが先行し、実態は相違点の顕在化や支援の一方的な押しつけが課題となることも多いようです。今回の取材では、「違い」に着目するだけでなく「同じ」であることを認め、互いに理解し合おうとすることの大事さをこの学校の生徒たちから学びました。

(取材・撮影 倉林順一 瀧口典子 本堂晴生 大山仁)